

## 社会参加を支える施設での実習を通しての学生の学び：看護者としての学びに焦点を当てて

著者名(日)	吉野 賀寿美, 佐久間 えりか, 笹木 弘美, 近田 真美子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
巻	14
ページ	57-64
発行年	2007
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006744/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006744/</a>

## 社会参加を支える施設での実習を通しての学生の学び ～看護者としての学びに焦点を当てて～

吉野 賀寿美・佐久間 えりか・笹木 弘美・近田 真美子

抄録：本研究の目的は、精神看護学実習を履修した学生84名を対象に、学生の記録から、病院実習後に社会参加を支える施設での精神科看護学実習を展開することで、学生が看護の機能についていかなる学びを得ているのかを分析し、今後の教育内容を検討していく際の基礎資料を得ることである。

学生の実習課題レポートを分析した結果、184の記録単位が抽出され、5つのコアカテゴリが形成された。学生の学びは、「対象者の社会参加に関する看護の機能」「対象者と看護者の相互作用」「病状コントロールに関する看護の機能」「対象者を取り巻く環境に関する看護の機能」「対象者の生活スキルに関する看護の機能」であった。社会参加を支える施設での実習を通して、学生は社会生活を送っている精神障害者と関わり、その中から、対象者に対して社会参加を意識しながら入院時から看護者が看護を展開していく重要性を学んでいた。そして、対個人との関係性だけではなく、社会や行政への働きかけまで、広い視野から精神科看護についての学びを得る機会となっていた。

キーワード：精神看護学実習 学生の学び 内容分析 看護教育

### I. はじめに

精神看護学実習において、臨地実習といえば精神病院内で看護学生（以下、学生とする）が患者と関わる場が学びの場とされている。しかし、精神科看護の展開の場は病院内だけではなく、地域で生活する精神障害者へのケアも重要である。特に、脱施設化に向けて精神障害者の生活の場が病院から地域社会へと急速にシフトされている中、彼らを取り巻く環境も変化してきている<sup>1)2)</sup>。このような背景の中で、地域社会で生活する精神障害者への看護の提供を考えることは、これから看護活動を展開していくことを志す学生にとって、重要なテーマである。

看護教育における臨地実習の意義は、実際の看護ケアを通して学生の体験としての学びが得られ、その体験を通して自己理解と他者理解を深めることにある<sup>3)</sup>。多くの学生は、このような自己と対象を理解していく過程をたどって専門職看護師としての価値観を築いていく。したがって、学生の価値観を築く場に携わる看護学教員として、社会のニーズに合わせて看護活動を展開できるよ

うな場を学生の学習・体験の場として提供することは、大切な課題であると考え<sup>4)</sup>。

先にも述べたように、現在の精神科看護は精神障害者の地域生活を推進していくことが求められている。そのため、地域で暮らす精神障害者とのかかわりが持てる場を学生に提供することは、精神看護学実習として意義あることとなる。これまでの先行研究では、病院内での精神看護学実習における学生の学びに関する研究はなされている<sup>5)~9)</sup>。しかし、地域に生活する精神障害者を対象とした看護学実習において、学生がいかなる学びをしているかの報告はない。本学の精神看護学実習では、病院内実習終了後、地域の精神障害者社会復帰支援関連施設（以後、本学で使用している名称である「社会参加を支える施設」とする）においての実習を通して地域で生活する精神障害者を対象とした実習体験を提供している。これまで、実習終了後のカンファレンスを通して、入院患者と地域生活者の両者に関する機会を持つことで、精神科看護についてより広がりを持った学びができていていると感じられてはいるものの、実際に学生の学びについて明らかにはしていなかった。

そこで、今回、病院実習後に社会参加を支える施設での精神科看護学実習を展開することで、学生が看護の機

能についていかなる学びを得ているのかを分析し、今後の教育内容を検討していく際の基礎資料を得ることを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象およびデータ収集

2006年1月から2007年7月の3年次から4年次に実施された精神看護学実習を履修した学生84名が実習最終日に提出した課題レポートを分析対象とした。全学生は、2週間の病院内での精神看護学実習終了後、社会復帰関連施設で1週間の実習を実施した。課題レポートとして、「精神に障害をもつ人々の社会参加を支える際に、あなたは、看護者として何を考え、何を行おうと考えるか、実習体験を通して考えたことを自由に述べてください」というテーマにそって、学生が施設での学びを自由記載した。

### 2. データの分析方法

学生が実習終了後に提出した「精神に障害をもつ人々の社会参加を支える際に、あなたは、看護者として何を考え、何を行おうと考えるか、実習体験を通して考えたことを自由に述べてください」のレポートの内容を詳細に判読した。学生の記述内容の分析は、Berelsonの内容分析の手法を参考にした<sup>10)</sup>。まず、「看護者としての学び」に関する記述されている主語と述語からなる1文章を記録単位とし、学生1人分の記録全体を文脈単位とした。

次に、学生の記述内容を精読し、学生の「看護者としての学び」に関する記述を記録単位で抽出し、類似性に従って分類していった。それぞれの分類にはカテゴリネームをつけ、カテゴリを形成した。この作業を繰り返し、内容の抽象度を高め、最終的なカテゴリに内容の主題を命名した。

本研究の信頼性を高めるため、筆頭著者の分類と他の共同研究者の分類とを照合しながら複数で内容の分類を検証した。

### 3. 倫理的配慮

学生には、研究の趣旨を説明し、協力の同意を得た。この際、匿名性の保証、協力への同意の有無が成績に関与しないことと自由意思であることを保証することも説明した。

## Ⅲ. 精神看護学実習の概要

本学の精神看護学カリキュラムの流れ、精神看護学実

習の実習目的・実習目標・実習方法・日程を以下に示す(表1、表2、表3)。

表1 精神看護学カリキュラムの流れ

時期	学習
2年次前期	精神看護学
2年次後期	精神看護学演習
3年次前期	地域精神看護学
3年次後期～4年次前期	精神看護学実習

表2 精神看護学実習の目標と目的

<p>&lt;実習目的&gt; 精神に障害をもつ人々について、「生活」の観点から理解し、必要な看護活動との共同が出来る能力を養う。</p> <p>&lt;実習目標&gt;</p> <p>① 人間を生物的、社会的、文化的、歴史的、倫理的などの諸側面からとらえることを通し、精神障害をもつ人々とその「生活」についての理解を深める。</p> <p>② 精神に障害をもつ人々とのコンタクトを通して自己洞察を深め、彼らとの相互関係について考える。</p> <p>③ 精神に障害をもつ人々との相互作用を通して、コミュニケーションの多様性と行動の多義性について理解する。</p> <p>④ 必要な看護を実践するための思考のプロセスと実践プロセスを学ぶ。</p> <p>⑤ 社会全体における精神医療の位置づけ、その枠内での看護の役割を理解し、現状の問題と将来の展望について考える。</p>
--

表3 精神看護学実習の方法と日程

施設	時期	方法
病院実習	1週目	1名の入院患者を受け持ち、かかわりを通して、患者—看護者関係について理解を深める。
病院実習	2週目	1週目のかかわりを通して理解したことと、記録を照らしあわせながら、患者理解を深め、看護の方向性を検討する。
社会参加を支える施設実習	3週目	独立型デイケア施設、小規模授産施設、小規模共同作業所、地域活動支援施設、就労継続支援施設にでむき、地域生活を送る精神障害をもつ人のかかわりを通して、彼らの地域生活について考える。

## Ⅳ. 結果

### 1. 記録内容の構成

84名の学生全員から同意が得られ、「看護者としての学び」の記述が明確であった83文脈単位を分析した。そのうち、「看護者としての学び」に関する学生の記述は184記録単位抽出され、これらの分析を進めた結果、17カテゴリに分類され、5つのコアカテゴリが形成された(表4)。

5つのコアカテゴリは記録単位数が多い順に、<対象者の社会参加に関する看護の機能><対象者と看護者の相互作用><病状コントロールに関する看護の機能><対象者を取り巻く環境に関する看護の機能><対象者

表4 「看護者としての学び」に関する記録単位数構成結果

コアカテゴリ		カテゴリ	記録単位数(%)	
1	対象者の社会参加に関する看護の機能	他職種との連携	22(12.0)	72 (39.1)
		社会生活・資源に関する情報提供	18(9.7)	
		退院への働きかけ	16(8.7)	
		偏見への働きかけ	9(4.9)	
		社会生活者への生活支援	7(3.8)	
2	対象者と看護者の相互作用	対象者への多様なかわり方	27(14.6)	48 (26.0)
		対象者の力を引き出す支援	21(11.4)	
3	病状コントロールに関する看護の機能	アセスメント	14(7.6)	29 (15.8)
		症状への対応	10(5.4)	
		リスクマネジメント	5(2.8)	
4	対象者を取り巻く環境に関する看護の機能	家族やキーパーソンと対象者間との調整・連携	9(4.9)	18 (9.8)
		家族支援	5(2.8)	
		対象者の居場所の確保	4(2.1)	
5	対象者の生活スキルに関わる看護の機能	対人関係スキル習得の支援	5(2.8)	17 (9.3)
		社会生活技術習得の支援	5(2.8)	
		自己管理能力向上への支援	4(2.1)	
		生活の現実に目をむける支援	3(1.6)	
計			184	(100%)

の生活スキルに関わる看護の機能>であった。以下、これら5つのコアカテゴリと17カテゴリについて内容を具体的にみていく(図1)。

## 2. 「看護者としての学び」の内容

### 1) 対象者の社会参加に関する看護の機能

《対象者の社会参加に関する看護の機能》のコアカテゴリは72記録単位で構成され、記録単位総数の39.1%であった。カテゴリは<他職種との連携><社会生活・資源に関する情報提供><退院への働きかけ><偏見への働きかけ><社会生活者への生活指導>の5つから成り立っていた。〔他職種との連携〕は、<他職種との連携><他職種との調整や情報交換><ネットワークの整備>という3つのサブカテゴリから導き出されており、具体的な内容として「福祉の従事者と連携をとり、病院から社会への橋渡しをすることが必要と思われる」や「他スタッフや同じ仕事をするスタッフと話し合いや意見交換ができる場を作ったり、調整していくこともまた看護者の仕事だと思えます」といった記述があった。〔社会生活・資源に関する情報提供〕は<社会生活上の不安の解消のための情報提供><施設に関する情報提供><制度やサービスに関する情報提供>の3つのサブカテゴリから構成され、具体的な記述として「看護者が施設の特徴など情報を把握し、伝えていくことで社会参加しようとしている人の選択肢を広げることが出来るのではないと思う」があった。〔退院への働きかけ〕は、<退院に向けた具体的なケア><社会参加への機会の提供><制度やサ

ービスに関する情報提供>の3つのサブカテゴリから構成され、「病棟では、退院後の生活を考えてケアを行うように、施設では帰宅後の生活も考えてケアを行っていく必要があると考える」という記述があった。〔偏見への働きかけ〕は、<社会と障害者とのかけはし><住民に障害者に対する知識提供><行政に働きかける><看護師自身の偏見への働きかけ>の4つのサブカテゴリから見出された。具体的には、「障害を持っている方と行政、あるいは社会の精神障害者へのイメージの変更につながるように障害を持つ方と社会の架け橋としての役割を担うことができると考えられる」「社会の人達と精神に障害をもつ人達との交流の機会をとるなど、偏見をなくすような活動もできるのではないかと思った」などの記述であった。〔社会生活者への生活支援〕は、<外来でのフォローアップ><訪問看護によるフォローアップ>の2つのサブカテゴリから構成され、「通院してくる患者さんに対するフォローに力を入れるべきだと思う」といった記述がみられた。

### 2) 対象者と看護者の相互作用

《対象者と看護者の相互作用》のコアカテゴリは48記録単位から成り、記録単位総数の26%であった。このコアカテゴリは、<患者の思いの傾聴と把握><患者の思いを表出させる><共に考える><患者の存在を支える>の4つのサブカテゴリからなる〔対象者への多様な関わり〕のカテゴリと<ポジティブフィードバックを通して、患者の自信の回復を助ける><自己決定と主体性

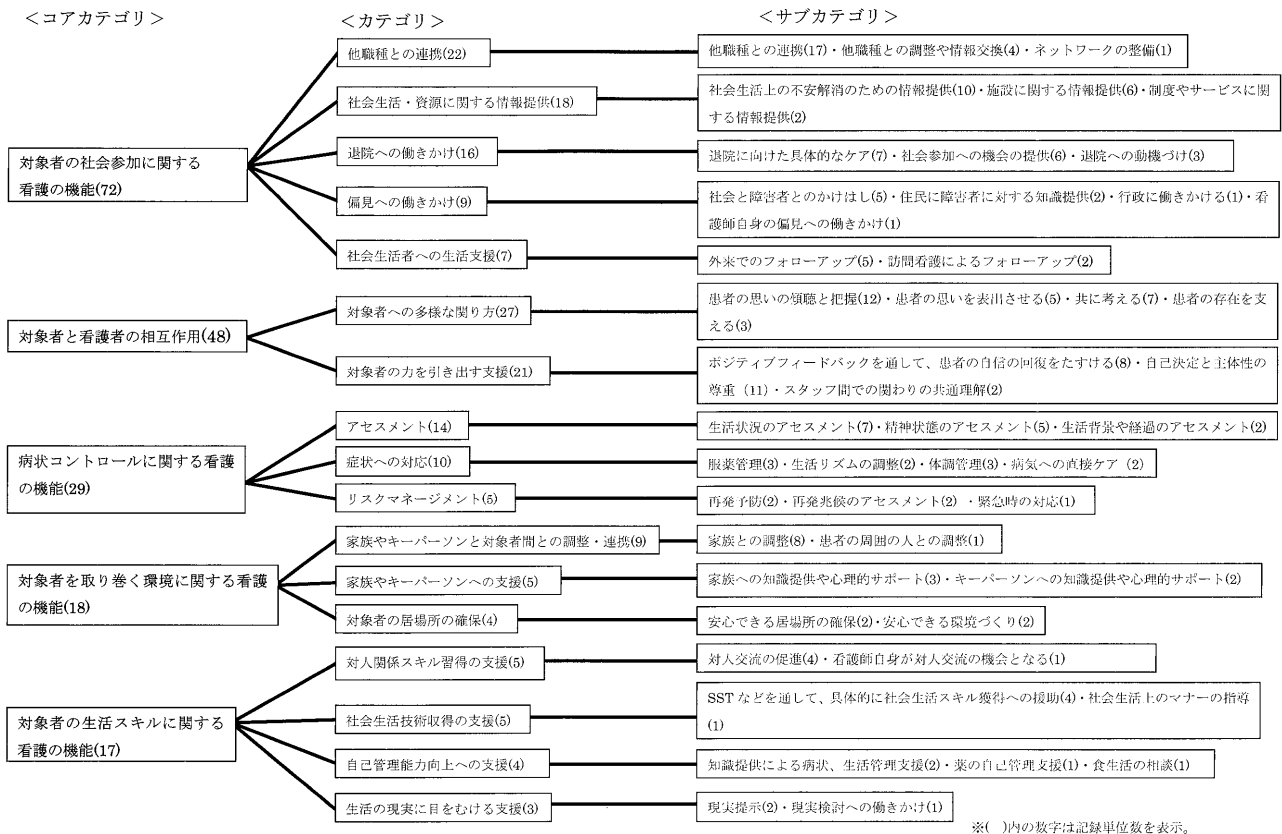


図1. 看護師としての学びの内容

の尊重><スタッフ間での共通理解>の3つのサブカテゴリからなる〔対象者の力を引き出す支援〕の2つのカテゴリから構成された。具体的な記述内容として、対象者への関わりには「**看護者はまずは精神障害を抱える当事者自身が将来どのような生活を望み、どうなりたいかをよく話し合い十分理解することが必要と思われる**」、対象者の力を引き出す支援には「**メンバーの自主性、主体性を尊重することで自信をつけてもらえるよう関ることだと思ふ**」があった。

### 3) 病状コントロールに関する看護の機能

《病状コントロールに関する看護の機能》は29記録単位で構成され、記録単位数総数の15.8%であった。これは、<アセスメント><症状への対応><リスクマネジメント>の3つのカテゴリから導き出された。〔アセスメント〕は<生活状況のアセスメント><精神状態のアセスメント><生活背景や経過のアセスメント>の3つのサブカテゴリからなり、「**社会参加を支える看護者としてその微妙な変化をすばやく察知して症状と生活能力を見極めた上で、それに応じた援助を提供していくことが必要だと思ふ**」という記述があった。〔症状への対応〕は<服薬管理><生活リズムの調整><体調管理><病気への直接ケア>の4つのサブカテゴリから導き出され、「**無理をしている人はいないかということを観察す**

**ることが重要であると考えられる**」や「**薬の内服をしているが、確認することも社会参加を支える時には大切であると思ふ**」などの記述があった。〔リスクマネジメント〕は<再発予防><再発兆候のアセスメント><緊急時の対応>の3つのサブカテゴリからなり、具体的な記述内容として「**看護者としては再発予防の観点から、その人がどのような刺激に敏感に感応するかを考えていかなければならない**」があった。

### 4) 対象者を取り巻く環境に関する看護の機能

《対象者を取り巻く環境に関する看護の機能》は、18記録単位からなり、記録単位数総数の9.8%であった。カテゴリは3つから形成され、〔家族やキーパーソンと対象者間との調整・連携〕は<家族との調整><患者の周囲の人との調整>の2つのサブカテゴリ、〔家族やキーパーソンへの支援〕は<家族への知識提供や心理的サポート><キーパーソンへの知識提供や心理的サポート>の2つのサブカテゴリ、〔対象者の居場所の確保〕は<安心できる居場所の確保><安心できる環境づくり>の2つのサブカテゴリからそれぞれ構成された。

具体的な記述内容としては、〔家族やキーパーソンと対象者間との調整・連携〕では「**当事者とだけではなく、その親や家族への働きかけ、当事者の将来について話し合い理解してもらっていく必要があると思われる**」、家

族やキーパーソンへの支援では「**看護師はキーパーソンとなる人に病気への理解を促す関わりをしていく必要があると思う**」、対象者の居場所の確保では「**彼らの安心できる環境づくりのための活動も求められていると思われる**」などがみられた。

#### 5) 対象者の生活スキルに関する看護の機能

《対象者の生活スキルに関する看護の機能》は、17記録単位で構成され、記録単位総数の9.3%であった。このコアカテゴリは＜対人関係スキル習得の支援＞＜社会生活技術習得の支援＞＜自己管理能力向上への支援＞＜生活の現実に目を向ける支援＞の4つのカテゴリから形成された。〔対人関係スキル習得の支援〕は、＜対人交流の促進＞＜看護師自身が対人交流の機会となる＞の2つのサブカテゴリから導き出され、「**人と触れ合うことをすすめて対人関係における協調性を身に付けられるように援助していかなければならないのではないかと**」という記述があった。〔社会生活技術習得の支援〕は、＜SSTなどを通して、具体的に社会生活スキル獲得への援助＞＜社会生活上のマナーの指導＞の2つのサブカテゴリからなり、「**社会でのマナーに反する行動・言動があった場合にそれを注意することも重要だと考えた**」という記述があった。〔自己管理能力向上への支援〕は、＜知識提供による病状、生活管理支援＞＜薬の自己管理支援＞＜食生活の相談＞の3つのサブカテゴリから成り、「**貴重品の自己管理、役割など責任感、服薬管理など、なぜ必要になってくるのが、対象者の目標と関連付けて考えていくことで、よりその対象者に合った関わりができるのではないかと思った**」という記述があった。〔生活の現実に目を向ける支援〕は、＜現実提示＞＜現実検討への働きかけ＞の2つのサブカテゴリから導き出され、「**看護師として行えることは、患者が自分の世界から現実の世界を受け入れて自我機能が再び正常に働くことができるよう、看護援助を通して働きかけることだと考える**」という記述内容がみられた。

## IV. 考 察

学生の記録物の分析結果から、社会参加を支える施設での実習を通して地域で生活する人と関わりを持つことで、学生が対象者の生活の観点から多くの学びを得ることができていたことが示唆された。

### 1. 学生の看護師としての学び

2週間の病院実習後、1週間の社会参加を支える施設で精神看護実習を行うことで、学生は様々な学びを得ていた。

まず、精神看護学実習では、疾患の特徴上、自分自身の思いの表出を困難とする対象者と関わるが多い。そのため、その対象者が何を思い、何を考えているかを知る努力が大いに要求される。こういった他者理解という課題を目の前にし、学生は対象者とのかかわりの中で、看護師—対象者間の関係性の構築と相互作用に対する看護の姿勢を学んでいた。折山の学生の学びの研究からも、患者とのかかわりといった視点で、患者との距離も持ち方や思いの傾聴、共感など対象者との関係性に関する学びが多くみられている<sup>11)</sup>。この対象者との関係性に関する学びは、社会参加を支える施設で実習することで、さらに理解を深めていけることになっていた。本研究の学生の記録からも《対象者と看護師の相互作用》というコアカテゴリが抽出されていた。これは、〔対象者への多様な関わり方〕と〔対象者の力を引き出す支援〕という対象者とのかかわりを通して得られた学びから導かれた2つのカテゴリで形成されたコアカテゴリであった。この中で、「**メンバーさんが何を求めて目標にしているかという部分をきいて、支えていく必要性があると感じました**」というような対象者の主体性を尊重するかかわりの必要性を学ぶ学生の記述がみられた。これは、対象者の自己決定と主体性の尊重といった、対象者を生活者としてみる大切な学びであった。地域で生活する人は、病院に入院している人とは違い、自分の生活に対して自ら決定していく力が要求されることを、社会生活者との関わりから学んでいた。

2つ目に、学生は実習を通して精神の疾患という課題にふれ、《病状のコントロールに関わる看護の機能》の重要性を学んでいた。これは、医療者としての看護師の機能、役割という視点での学生の学びが強く反映されていた。実習中、様々な精神症状をかかえる対象者とむきあうことにより、学生は、対象者の症状に介入しえる専門的知識のある看護師の役割や責任を学んでいた。そして、病院実習での強い精神症状を呈している対象者とのかかわりからの学びを生かし、社会参加を支える施設の実習中、地域で暮らす精神障害者が、症状悪化による再入院を余儀なくされる状況に陥ってしまうこと、その際薬の知識や病気の知識を持つ看護師がどのように介入していけるかについて考え、学びを深めていくことができていた。

3つ目に、《対象者の生活スキルに関わる看護の機能》の学びから病院内実習同様、社会参加を支える施設での実習においても、学生は対象者を生活者としてとらえ、生活するためのスキル向上を支援することの大切さを学んでいたことが明らかになった。一ノ山の研究でも、実習を通しての学生の学びとして患者の技術取得に関する学びが抽出されている<sup>12)</sup>。精神障害者にとって、生

活スキルの獲得は非常に難しく時間の要することである。入院中のみならず、実際に社会で生活してからも1つ1つ獲得していくことが要求される。そのため、社会参加を支える施設での実習中に、多くのスタッフの対象者への関わり、そして生きづらさを抱えている対象者との関わりを通して、学生は対象者の生活における技術習得の支援の必要性を学ぶことができていたことが示唆された。

## 2. 社会参加を支える施設での実習を体験することの意味

学生の記録の分析から、精神看護学実習を病院実習のみに限定せず、社会参加を支える施設での実習を病院実習後に体験することで深められた学生の学びが明らかになった。

まず1つ目に、社会参加を支える施設で実習を行うことにより、病院内での看護を振り返る機会となり、社会生活を送る前の対象者に対して病院内での看護者の機能について学んでいた。学生の学びに関する先行研究では、精神科看護実習は、病院内実習がメインとなっている<sup>9)-9)</sup>。病院内だけでの実習でも、実習の方法、課題提供のありかたにより対象者のリハビリテーションやセルフケアといった社会生活を視野に入れた学びを得ることができることがうかがえる。しかし、実際に社会生活者と関することで病院での看護を振り返るといったことは、病院実習と社会参加を支える実習の両方を経験することで得られた学びだといえる。特に、コアカテゴリの《対象者の社会参加に関する看護の機能》を形成した〔退院への働きかけ〕のカテゴリでは、＜社会参加への機会の提供＞のサブカテゴリの中で「**施設に参加者やスタッフとのスポーツやセミナーなどコミュニケーションやイベントなど媒体を使いながら多方向のアプローチをしていくことが重要**」といった学生の記述がみられ、入院患者が社会とのつながりが少なくなっていたことを振り返り、社会参加促進の必要性を強く認識したといえるだろう。

2つ目は、実際に地域生活を送っている対象者に対して、地域でケアを展開する看護者としての機能の学びであった。これは、上記で述べた《対象者の社会参加に関する看護の機能》のコアカテゴリを構成したもう1つのカテゴリである〔偏見への働きかけ〕のカテゴリから学生の学びが特徴的にうかがえる。学生は、地域で生活する障害者と関することで、社会での生きづらさに触れることができていた。そこで、看護者として＜行政に働きかける＞＜住民に障害者に対する知識提供＞といった内容の記述が学びに反映されていた。

3つ目は、《対象者を取り巻く環境に関する看護の機

能》のコアカテゴリから明らかにされた。先行研究から、病院内における患者にとっての安全な環境に関する学生の学びはあったが、精神障害者の地域における居場所に関しての学生の学びについてふれられているものはなかった<sup>5)-10)</sup>。しかし、本研究では、学生が対象者の地域での居場所に関して記述していた。これは、社会参加を支える施設で実習を行うことで特徴的な学びといえるだろう。社会参加を支える施設での実習を通して、学生は社会生活能力や作業能力の高い人から低い人まで様々な力を持つ人々を見てきている。その中で、症状が重く、施設に通うのが精一杯であるが、施設に来なければどこにも行く場所がない利用者もいる事を知った。学生の記述の中に、「**施設を安心して利用できるように、施設的环境を整え、実施できる仕事を準備すること**」「**メンバーにとって自由でくつろげる場や安心できる場所をつくり、その中でメンバーが主体的にできるようサポートすることが必要と思われる**」といったものがあり、学生がそれぞれの対象者の能力の違いを知り、その誰もが苦しくなることなく通える環境、自分が来てもいいのだと思える雰囲気や安心感を与える事が重要だと学ぶことができていた。

最後に、先に病状コントロールに関する看護の機能の学びから、学生が看護者としての専門的介入の重要性を学んでいたと述べた。これは、社会参加を支える施設での実習中、看護師以外の他の職種の人々とのかかわりから深められた学びの一つであるといえる。地域で生活している人々を支える専門職には、看護師以外にも福祉従事者や作業療法士など様々な職種の人々が携わっている。その中で、それぞれの職種の専門性を尊重しながら、看護師である自分たちの専門性として何をし得るかという学びが、実習体験から得ることが出来ていた。

## V. まとめ

学生の「精神に障害を持つ人々の社会参加を支える際に、あなたは、看護者として何を考え、何を行おうと考えるか、実習体験を通して考えたことを自由に述べてください」という課題レポートから、学生の看護者としての学びの記述を分析した結果、「対象者の社会参加に関する看護の機能」「対象者と看護者の相互作用」「病状コントロールに関する看護の機能」「対象者を取り巻く環境に関する看護の機能」「対象者の生活スキルに関する看護の機能」の5つのコアカテゴリが構成された。

これらのカテゴリの内容から、学生は社会生活を送っている精神障害者との関わりを通して、病院内での関わりから、対象者に対して社会参加を意識しながら看護者が看護を展開していく重要性を学んでいた。そして、対

個人との関係性だけではなく、社会や行政への働きかけまで、広い視野から精神科看護についての学びを得る機会となっていた。こういった学びの深まりは、病院実習を終えたあとに引き続く社会参加を支える施設での実習で経験した学生の体験が大いに関連していた。

92, 2006.

## 謝 辞

本研究に協力して下さった学生皆様に、心より感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) 青木典子：病院から地域への移行期における精神分裂病の居場所づくり，高知女子大学紀要看護学部編，49，55-66，2000.
- 2) 緒方明，三村孝一，今野えり子他：精神科訪問看護による精神分裂病の再発予防効果の検討，精神医学，39（2），131-137，1997.
- 3) 杉森みどり：看護教育学，医学書院，東京，1995.
- 4) 金城祥教：[人間の環でつくる精神看護学実習] 精神看護実習教育とその課題 精神看護授業研究会の経験から，看護教育，43（7），520-526，2002.
- 5) 斎二美子，石田真知子：精神看護実習における看護学生の精神障害および精神科看護に対する意識の変化と学びの関連，東北大医保健学科紀要，15（1），43-56，2006.
- 6) 永山弘子，市村久美子，秋野恵理：新カリキュラムにおけるリハビリテーション看護実習の学生の学び学生の実習記録から，茨城県立医療大学紀要，11，199-108，2006.
- 7) 入澤友紀，二渡玉江：精神看護学実習における学生の「学び」の分析 実習終了後の記録物の分析を通して，群馬県立医療短期大学紀要，9，65-72，2002.
- 8) 岡田佳詠，羽山由美子，水野恵理子，下枝恵理：精神看護学実習についての看護学生の意識に関する研究，聖路加看護大学紀要，28，28-38，2002.
- 9) 滝下幸栄，山田京子：精神看護実習における学習内容の評価，日本看護学教育学会誌，10（2），158，2000.
- 10) Berelson. B，稲葉三千男，金圭煥：内容分析，みすず書房，東京，1957.
- 11) 折山早苗：精神看護学実習における「学び」の内容分析と看護過程の有効性，日本看護研究学会雑誌，30（1），137-144，2007.
- 12) データマイニングを用いた精神看護学実習記録からみた看護学生の学びの分析，看護教育，37，90-



# Student's learning from psychiatric nursing practice at community-based institutions. ～ Focusing on nursing functions ～

Kazumi YOSHINO • Erika SAKUMA • Hiromi SASAKI • Mamiko KONDA

**Abstract :** The aim of this study is to analyse what students learned from psychiatric nursing practice at community-based institutions in order to obtain materials to improve our teaching.

Records from 84 students were examined, 184 record units were extracted and 5 core-categories of students' learning (<Nursing function on clients' social participation> <Interaction between nurses and clients> <Nursing function on controlling psychiatric condition> <Nursing function on environment for clients> <Nursing function on living life skills for clients>) were composed.

Through practice at community based institutions, students interacted with people with mental illness who were living in a community and learned the importance of providing nursing that is aiming for their rehabilitation. This method of practice gave an opportunity for students to gain wider perspective psychiatric nursing, such as for individual and society as a whole.

**Key Words :** psychiatric nursing practice, student learning, content analysis, nursing education